

特集「資料論 I」

博物館資料の継承に向けて  
—南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の資料番号の  
歴史的検討から—

如法寺 慶大

南山大学人類学博物館

Toward the inheritance of museum objects: Historical analysis of  
object numbers noted in Papua New Guinea ethnographic objects in  
Nanzan University Museum of Anthropology

Nanzan University Museum of Anthropology

NYOHJOI Keita

はじめに

- 1 研究の視角
- 2 南山大学人類学博物館所蔵のパプアニューギニア民族誌資料
  - 2-1 南山大学人類学博物館略史
  - 2-2 パプアニューギニア民族誌資料の概要
  - 2-3 資料整理作業の課題—コレクションの分類へ向けて—
- 3 注記番号に隠された意味と歴史背景
  - 3-1 注記番号の概要
  - 3-2 観察から見出された注記番号の特徴
  - 3-3 ある史資料の発見
  - 3-4 注記番号の意味と注記時期—史資料の照合作業から—
  - 3-5 小活
- 4 登録番号の設定背景と意味
  - 4-1 登録番号の設定時期—博物館に残された文書記録から—
  - 4-2 登録番号の設定背景—展示室の資料配列との関係から—
  - 4-3 登録番号によるコレクションの統一
  - 4-4 小活
- 5 博物館資料の継承へ向けて—むすびにかえて—

# 博物館資料の継承に向けて

## —南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の資料番号の 歴史的検討から—

如法寺 慶大

### はじめに

本稿は、南山大学人類学博物館が所蔵するパプアニューギニア民族誌資料を対象にして、そこに注記された資料番号の歴史背景を、様々な視点から複合的に検討するものである。そこでは、過去に行われた資料整理作業の経緯を、モノ自体に残された痕跡や関係史資料から推測するなかで、その歴史的な流れを明らかにするとともに、博物館資料の継承に向けて考察を試みる。

同館が所蔵するパプアニューギニア民族誌資料は、「11-〇〇〇」という登録番号によって管理され、その番号は実物資料にも注記されている。例えば、学芸員が資料情報を検索する場合は、登録番号から資料台帳を検索することで目的の情報にたどり着くことができる。つまり、現在は、この登録番号が実物資料と情報をつないでいるのである。しかし、多くの当該民族誌資料にはそれとは異なる数字が注記されている。「なぜ、登録番号以外の数字が注記され、その意味は伝わっていないのか」という疑問を抱いたのが、本稿における調査のきっかけであった。本稿は、そうした長年の整理作業のなかで埋もれてしまった資料番号の意味とその歴史背景を読み解こうとする試みである。

調査に際して、筆者は実物資料に注記された数字（以下、注記番号とする）の観察と、博物館で新たに発見された関係史資料の検討を行った。こうした

調査に加え、後述するように整理作業を通時的な視点から捉えることで、人類学博物館における整理作業の歴史の一端を明らかにするとともに、博物館資料の継承という問題へ考察をつなげていく。

第1章では、これまでの博物館における整理作業の先行研究を例にあげ、調査における視角を示し、第2章では対象資料である人類学博物館所蔵のバプアニューギニア民族誌資料の概要と、これまでの整理作業の経緯をまとめ、現在の課題について述べる。第3章からは、その課題に応答するべく注記番号の調査と分析について、その過程も含めてまとめ、第4章では登録番号の設定時期とその歴史背景について考察をする。そして、第5章は、むすびにかえて、これまでのまとめと、博物館資料の継承という課題へ向けて考察をしていく。

## 1 研究の視角

本章は、資料整理作業に関係する先行研究を概観し、本稿における筆者の視角を示していく。

博物館の整理作業は、博物館業務の一環として基礎作業であることは、その関係者にとって、すでに自明のことである。その重要性については柵橋源太郎によってすでに言及されており、そこでは資料の受入簿や目録記録の作成方法、資料研究との関係性も指摘されている(柵橋 1950: 114-124)。その後、博物館学の概説書が刊行されるが、そのなかでも資料整理作業について説明される。そこでは資料収集における受入から目録化、その他保存や活用などの博物館機能との関連性から、その理念や方法論が説かれることが多く、各館によってそのあり方は異なると指摘されながらも一般的方法論について言及される(青木編 2012)。こうした報告は、新規資料の収集を念頭に置いた整理作業の方法論として力点が置かれ、その有用性に対して認めるところではあるが、すでに収蔵された博物館資料に対する言及が弱い印象を受ける。

一方で、こうした概説とは別に、個々の博物館が行う整理作業に関する報

告もなされている。例えば、整理作業自体に目を向ける北澤智豊は、武蔵野美術大学美術館・図書館の整理作業を紹介するとともに、所蔵品の整理作業を「博物館が本性的にもつ構造的徴表であり、地道な営為の積層によってつくられた一つの基本的な機能である」（北澤 2016: 334）とし、博物館における整理作業の位置づけを示した。

また、所蔵資料の目録化とデータベース化について問題を挙げた笹倉いる美は、その方針と方法について報告をしている（笹倉 2000）。笹倉は、同館が採用する方法論を紹介しながらも、実物資料と情報との結びつきの重要性について言及している。伊藤敦規はアメリカ南西先住民「ホピ製」木製人形を対象にし、そこに記載された制作者や収集者のサインと、既存の管理情報を分析するなかで、人形の制作者名を遡及する試みを行なっている（伊藤 2013）。このなかで、伊藤は管理目録のデータが客観的なデータとして引き継がれることに警鐘を鳴らし、資料管理を支える方針を継承することの重要性を指摘する。

ほかにも、博物館施設にて自身が行った整理作業に注目した長谷川真美は、その経験から、整理作業をモノとヒトの相互行為として捉え、その動的な現場を民族誌としてまとめている（長谷川 2012）。整理作業を通時的な視点で捉え、そこで行われた複雑な整理作業のプロセスを分析することで、ヒトとモノの相互関係を示した。

このような様々な事例の報告は、整理作業が、機械的ではなく、ヒトとモノ、つまり整理作業者と博物館資料が関わりながら、歴史的に行われてきた営為であると捉えさせる。本稿は、この点をふまえて、整理作業をヒトとモノが相互に関わり合いながら行う歴史的営為として捉えていく。そして、そうした博物館における営為が、どのようなプロセスを経て現状の博物館資料を形成してきたのか、という歴史性と継承のあり方に向けた考察へとつなげる。

## 2 南山大学人類学博物館所蔵のパプアニューギニア民族誌資料

本稿の調査対象となるパプアニューギニア民族誌資料は、1964年頃に人類学民族学研究所付属陳列室に収集された。収蔵から現在に至るまでの期間のなかで、資料を扱う人間が入れ替わり、収蔵・展示する場所が変わり、整理方法も変更されており、本稿はその歴史背景を追うものである。本章では、まず南山大学人類学博物館の歴史を概観し、その収蔵資料であるパプアニューギニア民族誌資料の概要と整理作業の歴史についてまとめるなかで、その課題を挙げていく。

### 2-1 南山大学人類学博物館略史

人類学博物館の歴史は、すでに『南山大学五十年史』、『南山学園創立75周年記念誌HOMINIS DIGNITATI』にまとめられており、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンタ研究報告においても博物館の設置に関する経緯についてまとめた報告がだされている(永井 2011)<sup>1)</sup>。

人類学博物館は1949年9月に設立した人類学民族学研究所の陳列室として設置されたのが、その前身となる。これは南山大学が五軒家町に設立されて初年度のことである。1964年、大学が山里町へ移転すると研究所は第一研究棟へ、陳列室は図書館地下1階へと移転され、両施設は距離のうえでは分離をした形をとった<sup>2)</sup>。1967年、陳列室は博物館相当施設としての認可を受け、これにより学内での博物館実習が可能となった<sup>3)</sup>。その後、現時点においてその時期は確定できていないが、図書館地下1階から3階への移転が行われた。この移転はおそらく1970年代前半頃と思われる<sup>4)</sup>。そして、1979年に「南山大学人類学博物館」へ名称変更がなされ、1983年には旧LL教室を改築してG棟地下へ移転をし、大学博物館としての活動が継続されていった。2013年に「全ての人の好奇心のための博物館」というコンセプトのもとR棟地下1階へと移り、現在に至っている<sup>5)</sup>。この陳列室から博物館に至るまでの間、様々

な先達が関わっており、彼らの調査と、その結果としての資料収集によって博物館の歴史はつくりあげられていった(黒沢 2014: 1)<sup>6)</sup>。

その収蔵資料は考古資料・民族誌資料・民俗資料・近現代生活史資料であり、これらの資料は4つのカテゴリーに大別されている。一つは、J. マリンガー神父、G. グロート神父、H. アウフェンアンガー神父など神言修道会所属の神父によって収集された資料群、二つ目は歴代の担当教員などの調査によって収集された資料群、三つ目は博物館に寄贈された資料群、四つ目は、民具と昭和の生活史資料である。どの資料群も学術的に価値のある資料である<sup>7)</sup>。次節で紹介するパプアニューギニア民族誌資料は、一つ目にある神言修道会所属の神父による資料群と、二つ目の歴任教員による資料群が含まれている。

## 2-2 パプアニューギニア民族誌資料の概要

人類学博物館が所蔵するパプアニューギニア民族誌資料は、大きく二つのコレクションによって構成されている。一つ目は、神言修道会所属の神父であったH. アウフェンアンガー神父によって収集されたアウフェンアンガーコレクション、二つ目は、1964年に南山大学東ニューギニア学術調査団によって収集された高山地帯の民族誌資料である。この高山地帯の資料のなかには、調査団の団長であった沼沢喜市が1966年に行った高山地帯単独調査時に収集した石斧などの資料も含まれている。

アウフェンアンガー神父は、神言修道会が高山地帯に設立をしたミッション施設へ1934年に着任をし、その後20年近くニューギニアで過ごしていた。この間、高山地帯に関する多くの論文を発表し、1955年にはウィーン大学で博士号を取得している<sup>8)</sup>。1961年に南山大学にて教鞭をとり、1963年にはニューギニア北東部にあるウエワクとその西側に位置するプリンス・アレクサンダー山脈などの内陸部、セピック地域にてフィールドワークを行い、1964年には南山大学東ニューギニア学術調査団の民族学班として高山地帯の調査に参加している。アウフェンアンガーコレクションは、彼が現地での滞在時及

び調査時に収集したものと思われ、セピック地域の祖霊像や仮面など、歴史的にも貴重な収集資料である。

南山大学東ニューギニア学術調査団は、1964年に戦後初の海外調査団として科学研究費の支援を受けて派遣された。調査団は、ニューギニア高地を人類学的に空白地帯とみなし、調査の目的を「東南アジアから南洋にかけての民族と文化の歴史を解明するための手がかりを得られることと期待されている」(中日新聞編 1965: 1)としていることから、当該地域の歴史と文化史の解明に定めていたものと思われる。調査団は沼沢喜市(民族学担当)を団長として、民族学担当のアウフェンアンガー神父、言語人類学担当の浅井恵輪、考古学担当の小林知生と早川正一、精神医学担当の荻野恒一の6名によって編成され、これに中日新聞と東海テレビの報道特派員がついている。ニューギニア高地のゴロカを拠点とし、そこから各班で調査が行われた。現在の収蔵資料は、主に民族学班と考古学班によって収集されたものと思われる。磨製石斧をはじめ、弓矢、編袋、装飾品など、彼らによって収集された民族資料からは、当時の高山地帯における物質文化の様子を伺い知ることができる。また、考古学班による発掘調査においては、その出土した石器資料から高山地帯の石器文化について調査者の見解が述べられている<sup>9)</sup>。また、調査団メンバーが撮影した写真などの映像記録も博物館にて保管されている。

これらの収集資料は陳列室、そして人類学博物館へと引き継がれ、現在に至る。そのなかで各時代で整理作業が行われてきたのである。

### 2-3 資料整理作業の課題—コレクションの分類へ向けて—

人類学博物館で行われたパプアニューギニア民族誌資料の整理作業について、その多くは記録されておらず、過去の作業内容を知ることは難しい。しかし、『南山大学人類学博物館紀要』の報告や、職員間の引き継ぎ資料と相まって、現在の整理状況について把握することができる。ここでは、主に紀要による報告から現状を整理し、整理作業の課題について挙げていく。

紀要では、山崎剛・木田歩・林佑による報告がみられる。そのなかで山崎



と木田は、2005年末から2006年にかけて、調査団の一員であった早川の新規資料、特に写真や動画など映像資料に関する報告を挙げている（木田 2008、山崎 2007）<sup>10)</sup>。山崎が行った作業では、当時の写真や日誌について早川にもコメントをもらっていたようである<sup>11)</sup>（山崎 2007）。こうした新規資料を含めて、パプアニューギニア民族誌資料の内容をまとめたのが林であり、その成果は図1の概要にある（林 2009）。

### 南山大学人類学博物館所蔵パプアニューギニア民族誌資料概要

総点数・・・・・・・・・・1773点（①+②+③）

①人類学博物館所蔵資料 [登録番号11-1～11-547]・・・・・・・・・・547点

(1)	アウフェンアンガー寄贈資料 ⇒祖霊像・仮面・装飾品・木皿・木槌・霊笛・太鼓・槍・枕等	21点
(2)	1964年南山大学東ニューギニア学術調査団：考古学班収集資料 ⇒磨製石斧	4点
(3)	1964年南山大学東ニューギニア学術調査団：民族学班収集資料 ⇒首飾り・磨製石斧	4点
(4)	収集者、収集地等不明資料 ⇒祖霊像・石斧・仮面・桶・装飾品等	518点

②オープンリサーチによる2007・2008年度新規登録資料（早川正一寄贈）

[登録番号11-1000～11-1842]・・・・・・・・・・843点

(1)	1964年南山大学東ニューギニア学術調査団：考古学班収集資料 ⇒発掘調査出土品（磨製石斧の破片等）・民族学資料（磨製石斧・装飾品等）	739点
(2)	1964年南山大学東ニューギニア学術調査団：民族学班収集資料 ⇒磨製石斧（沼沢喜市収集）	104点

③映像資料・・・・・・・・・・383点

(1)	動画：8mmフィルム	7本
	動画：1964年東海テレビ16mmフィルム（デジタル化済）	2本
(2)	写真：ポジ・スライド35mm	227コマ
	写真：ポジ・スライドハーフ	54コマ
	写真：ネガ・フィルム	33本
	写真：6×6cmモノクロネガフィルム（沼沢喜市撮影、デジタル化済）	60本

④その他未整理資料

図1 パプアニューギニア民族誌資料概要表 [早川（2011: 146）を筆者改変]

こうした先達の職員による整理作業の成果は、現在に引き継がれており、それが博物館活動において意義深いものであったことは間違いない。しかし、いくつかの課題も残されている。そのなかで、特に挙げられるのは、登録番号11-1から11-547がつけられた547点の資料群においては、資料収集者を軸においたコレクションの分類がなされていないという点であろう。つまり、パプアニューギニア民族誌資料に属する個々の資料分類が、アウフェンアンガー神父が収集したコレクションに属する資料であるのか、それとも南山大学東ニューギニア学術調査団が収集したコレクションに属する資料であるのか、という点において不明確な状態が続いているのである。

こうした状態を危惧した早川も資料分類の再点検について言及しており（早川 2011: 145）、当該資料を扱う担当学芸員にとっては、コレクション単位での資料分類は目下の課題といえる。ただし、資料台帳や地域名を手がかりに分類する方法もとられていることから（竹尾 2014）、全く手がけられていないわけではない。本稿はこうした成果を否定するものではなく、ここでより課題としたいのは、過去に行われた資料整理の歴史背景について把握すること、そして、そこから現在のコレクションを捉え直すことにある。

このような課題に対応するものとして、本稿にて行う注記番号の歴史背景の調査がある<sup>12)</sup>。次章より、その調査を示していく。

### 3 注記番号に隠された意味と歴史背景

登録番号以外の注記番号が示す意味と歴史背景を調査する上で、問題として挙げられるのは、それを記した記録文書などが見つかっていないという点にある。そこで、本章では、注記自体の観察成果や、新しく発見した史資料との関係性から読み解いていく方法をとる。ここでは、それぞれの資料から得られる情報が、注記番号と徐々につながっていく様子がみてとれる。この調査から、注記番号の意味は、それが「正しく」機能すればコレクション単位での資料分類に対して有効に働く、という過去の分類体系の一端を示すこ

とが明らかになる。なお、以下に述べる資料調査は現在も継続中である。

### 3-1 注記番号の概要

この節では、調査対象となる注記番号の概要についてまとめていく。ここでは、各注記番号について、番号の意味がわからず、機能していない、という現在の状況が示される。本稿では、以下の調査において、便宜的に各注記番号を注記①・注記②・注記③・注記④と表記をする。

#### (1) 注記① 書き込みラベル

これは一部の資料に直接貼り付けられている長方形の紙ラベルである<sup>13)</sup>。ここには、手書きによる筆記体で地名や人物名が書き込まれている。その多くは、経年劣化による紙自体の破損や文字の消失などの状態がみられるが、一部に残存状態が良いものがある。書き込まれている文字は「Rev. Br Gonzaga From Wewak H. Aufenanger」とあり、なかにはAufenangerの後に地名が表記されているものもある。このラベルは図2-2に示している（図2-2参照）。



図2-1 婚資用木製鳥付き籐製品（正面）[南山大学人類学博物館所蔵]



図2-2 婚資用木製鳥付き籐製品（背面）[南山大学人類学博物館所蔵]

(2) 注記② 1～3桁の数字による注記番号

これは資料に直接書き込まれた注記番号であり、1から200番代までである。調査開始時はそれが表す意味が不明な状態であり、この数字を直接説明する記録資料は現時点（2017年1月）でも見つけることができていない。調査を行う前の筆者もこれが意味をもつ「番号」ではなく、むしろ単なる「記号」のように思っていた。この注記が施された資料を概観すると、アウフェンアンガー神父に関連する資料が多い。図2-2では「86」の注記番号を示している（図2-2参照）。

(3) 注記③ 「A-〇〇」

これはアルファベットの大文字のAと数字を組み合わせた注記番号である。調査開始時には、この番号が表す意味も不明なままであった。この注記が施された資料を概観すると、高山地帯関連と思われる資料に多い。図3では「A22」の注記番号を示している（図3参照）。

(4) 注記④ 登録番号「11-〇〇〇」

この番号は、11と1桁から3桁の数字が組み合わさり、登録番号として現在も機能している。この登録番号から資料台帳を検索し、資料情報までたどり着くことができる。図2-2では「11-65」、図3では「11-327」の登録番号を示している（図2-2、図3参照）



図3 骨製短剣 [南山大学人類学博物館所蔵]

以上、調査対象となる注記番号を注記①・注記②・注記③・注記④として挙げ、それぞれの概要を示した。これらの番号は、一つの資料のなかに同時に書き込まれ、併存していることが多い（例えば注記①+注記②+注記④や、注記③+注記④）。なかには、注記④の登録番号のように現在も機能しているものもあるが、注記①～③に関しては、それが表す意味については不明なままであり、資料番号として機能しているとは言い難い状況にある。次節以降では、ここにみる注記番号の意味と歴史背景を探っていく。

### 3-2 観察から見出された注記番号の特徴

先述したように、注記番号の詳細を記した記録文書は、現時点では見つからない。そこで、本節で示すように、まずは注記の記し方や、その内容など、対象そのものを観察するところから始めた。これは注記自体に特徴や傾向を見出すことを目的としている。一見すると小さなことであっても、これらの情報は過去の整理作業時の状況を教えてくれるものとする。以下では、その観察と分析の様子を示していく。

まず、前提として資料には複数の注記番号が記されているが、一つの資料に注記②と注記③は重なることがなく、注記にも組み合わせがある点に気づく。その組み合わせは、例えば注記①・注記②・注記④や、注記③・注記④が挙げられ、注記④の登録番号はいずれの注記とも重なる場合がある。

次に、注記②に注目すると、必ずしも全ての注記ではないが、多くの数字の最後にピリオドのような「点」が書かれていることに気がつくことができる。

この様子は図2-2、図4で示



図4 人面 [南山大学人類学博物館所蔵]

している。この「点」の意味に関しては不明なままである。しかし、ここでは、「数字の最後に点を書く」という行為自体に注目をしたい。なぜなら、この注記方法には一定の規則性がみられ、そこには過去に整理作業を行った人物の何らかの意図が感じられるからである。おそらく、この「点」がつく数字は、作業方針をもった整理作業のなかで注記されており、一定のまとまりを表している可能性が高いと思われる。

そして、注記①の書き込みラベルへと目を移していく。この紙製のラベルには、地名と人物名が書かれており、この時点では最も情報量が多い注記となる。ここには「Rev. Br Gonzaga From Wewak H. Aufenanger」が筆記体で書かれ、なかにはAufenangerの後に地名が書かれているラベルもある。ここからは、その表記が示す内容について検討を加えていく。検討にあたって、注記①のラベルが貼られた資料が、実際にアウフェンアンガー神父によって収集された資料であることを同定するために、その著書の記述から照合していく形をとる<sup>14)</sup>。

照合可能な資料は限定されてはいるが、そのなかでも図2-1、図2-2に示す婚資用木製鳥付き籐製品（注記②=86、注記④=11-65）は、書き込みラベルと著書の記述が残されている数少ない資料であるため、ここでは照合例として取り上げる（図2-1、図2-2参照）。この資料のラベルには「Rev. Gonzaga Wewak from H. Aufenanger (Negri）」という情報が書かれ、地名を表すNegriという文字も記されている<sup>15)</sup>。この婚資用木製鳥付き籐製品は、籐で編まれた筒状の胴体部に、ヒクイドリを模した木製の頭部を取り付けていたもので、その胴体部には顔面の表現がみられる。その著書のなかで資料の説明とともにスケッチが残されていることから、アウフェンアンガー神父がこれに興味を寄せ、収集したと考えられる。そのほか判断材料として、その収集地に関しても著書の記述と書き込みラベルの記述が、ネグリ地区 (Negri) で一致していることも挙げられる。

これらの事実関係を考慮に入れると、「Rev. Gonzaga Wewak from H. Aufenanger (Negri）」という書き込みは、アウフェンアンガー神父がネグリ

地区 (Negri) から、ウェワク地区 (Wewak) へ資料を送った、ということの意味すると考えられるのではないだろうか。つまり、この書き込みラベルは、資料が収集地区からウェワクへと動かされた、という収集当時のモノの物理的な動きを表しているのである。また、このことは収集者が知り得る内容であることから、本人直筆の可能性が高いと考えられる。

この書き込みラベルについて、さらにもう一点付け加えておきたい。当該資料のラベルの端部に注目すると、わずかながらインクが重なる部分が見られる (図2-2参照)。これは、注記①の書き込みラベルが貼り付けられた後に、注記②の数字が記され、その端が紙に重なった痕跡であると判断できる。つまり、これは注記①と注記②の注記順を示す有効な手がかりであり、注記①が貼り付けられた後に、注記②の数字が資料に記されたと考えられる。

このように、本節では注記番号の記し方の特徴や傾向を掴むために、注記自体を観察し分析を試みた。その結果、以下の4つの点を明らかにすることができた。一点目は、注記番号は一つの資料に併存した場合、そこに組み合わせがみられる点、二点目は、数字の「点」から注記②が一定のまとまりを表している点、三点目は、注記①の書き込みラベルがアウフェンアンガー神父関連のものである点、四点目は、注記①と注記②が記された順序がわかる点である。

いずれもわずかなことではあるが、資料整理時の経緯を知る上で重要な要素である。一点目と二点目からは、注記②と注記③は別々のまとまりを示している可能性が指摘でき、三点目からは注記した人物、四点目からは収集後の整理作業の経緯を推測することができる。

しかし、注記②と注記③が示す具体的な意味や、注記④も含めた注記順序などは依然として不明なままである。そこで次節以降では、それらを明らかにするべく関係史資料を含めて分析を行う。

### 3-3 ある史資料の発見

筆者は、ここまでの調査中に博物館にて、ある史資料を発見している。実は、この史資料の内容が、注記番号の意味を特定するのに重要な要素となるのだが、その詳細は後述に譲る事にし、本節では史資料の内容自体を分析していく。つまり、なぜ、この史資料が注記番号の意味と関係するのか、その根拠を示していく節となる。

まず、この史資料の概要を述べ、次に史料①と史料②が示す内容について検討をしていく。なお、本節でも、便宜的に各史資料は、史料①・史料②・史料③・史料④と表記をする。

#### (1) 史料① 「パプアニューギニア関連資料リスト」

これは「南山大学人類学研究所」のノートに手書きで記入された資料リストである。文字に英語の筆記体を使用される。手元にあるのはリストの原文ではなく、その複写である。その項目には、「NO」・「品名」・「場所」が設けられている。向かって右端には登録番号（「11-〇〇〇」）が手書きで記され、照合作業を行った形跡がみられる。リストには、1～225番の資料が記されている。下記は史料①のリストの一部を翻刻したものである。リストは、図5に示している（図5参照）。

NO	品名	場所	
1	very old spear with carvings	Schouten islands	11-479
2	very old spear with ancestor's head	" "	11-480
3	Post of an old carved spear	" "	11-470
4	old spear with ancestor's head	Tringi	11-481

No.	品名	場所	番号
1	very old spear with carvings	Schouten islands	11-479
2	very old spear with ancestor's head	" "	11-480
3	Part of an old carved spear ancestor's	" "	11-470
4	old spear with ancestor's head	Tringi	11-481

図5 史料① [南山大学人類学博物館所蔵]



## (2) 史料② 「LIST A CIMBU AREA」リスト

これは「LIST A CIMBU AREA」というメモがある資料リストである。これは手書きではなく、出力された文書である。向かって左側より「登録番号 (11-〇〇〇)」・「A番号 (A-〇〇)」・「NOMENCLATURE」の項目が設けられている。資料は、A-1～1-84が載せられている。下記は史料②のリストの一部を翻刻したものである。このリストは図6に示している(図6参照)

11-	A-	NOMENCLATURE
279	1	Cassowary's feathers helmet. Highlands.
33	2	Headrest.
300	3	Netbag used by women.
	4	Native shell money.

## LIST A CHIMBU AREA

11-	A-	NOMENCLATURE
279	1	Cassowary feathers helmet. Highlands.
33	2	Headrest.
300	3	Netbag used by women.
	4	Native shell money.

図6 史料② [南山大学人類学博物館所蔵]

## (3) 史料③ 「最後の未開地 東ニューギニア展」の出品リスト

これは1965年5月に松坂屋で開催された展覧会「最後の未開地 東ニューギニア展」に出品された資料のリストである<sup>16)</sup>。この展覧会は、南山大学東ニューギニア学術調査団が収集した考古・民族資料を紹介するものであり、246点が出品された。リストには左から、「リストNo」・「分類No」・「品名」・「地名」・「NOTE」の項目が設けられている。下記の史料③のリストの一部を翻刻したものである。このリストは図7に示している。

## (4) 史料④ 「パプアニューギニア民族資料(1)収蔵品目録第1号第1分冊」の例言の下書き

これは1983年に人類学博物館が刊行した『パプアニューギニア民族資料(1)収蔵品目録第1号第1分冊』の例言の下書きである。この冊子には、アウフェ

リストNO	分類No	品名	地名	NOTE
12	134	腰みの (女性用)	セビック	
13	A-44	頭かざり (こがね虫)	高山地帯	
14	A-27	頭かざり (鳥の羽根)	〃	
15	A-60	頭かざり (有袋動物の尾)	〃	

12	134	腰みの (女性用)	セビック	
13	A-44	頭かざり (こがね虫)	高山地帯	
14	A-27	頭かざり (鳥の羽根)	〃	
15	A-60	頭かざり (有袋動物の尾)	〃	

図7 史料③ [南山大学人類学博物館所蔵]

ンアンガー神父が収集した資料と、南山大学東ニューギニア学術調査団収集の資料が挿図つきで紹介されている<sup>17)</sup>。史料④はその下書きであり、いくつもの修正をした跡がみられ、例言に反映されている。

以上が、調査で用いる史資料である。以下では、史料①と史料②について、その内容が示す意味について検討していく。

まず、これらの史資料が置かれていた状況を振り返り、その位置づけについて確認をしておく。筆者は、これらの史資料を旧人類学博物館であるG棟地下の視聴覚教室の整理中に、「パプアニューギニア民族資料原稿等」と明記された箱から発見した。この箱には、『パプアニューギニア民族資料(1)収蔵品目録第1号第1分冊』に掲載された図のレイアウト図やトレース図などがまとめられていた。そのなかに、史料①から史料④も含まれていたのである。この発見時の状況を考慮にいと、史料④の例言の下書きはもちろんのこと、史料①から史料③にみる資料リストも当該冊子の制作時に参照用として使用されたと考えられる。つまり、これらの史資料はパプアニューギニアの収蔵品目録の関係史資料という位置づけになる。

さて、ここからは、これらの史資料の内容に注目していきたい。まずは、

史料①からである。手書きの筆記体で記録された史料①では、その項目に記載された「場所」、つまり地名に注目していく。リストには、Schouten islands・Turingi・Kep・Alexander Range・Sepik・Kaugia・Negriなどの地名が記載されている。これらの地名を、アウフェンアンガー神父の著書である*The Passing Scene in North-East New-Guinea*を用いて、彼が訪れた地名と照合してみると、ほとんどの項目で一致することがわかった。このことから史料①のリストは、アウフェンアンガー神父が収集した資料を示したリストであると思われる。

また、史料④の例言の下書きには、いくつか興味深い内容が記されており、それは「3、品名・用途等については現品付添あるいは注記の記事や当館目録の記載及びアウヘナ<sup>(ママ)</sup>ンガー神父が展覧会目録のために作成したメモ等を参照した。」と「アウヘナ<sup>(ママ)</sup>ンガー神父のメモは本学OBの□□□□氏のもとに控えが残っていたものを参照させていただいた」の内容である<sup>18)</sup>。ここから、収蔵品目録には「□□□□氏のもとにあったアウフェンアンガー神父のメモの控え」が参照のために使用されたことがわかる。この例言の内容と、リストの内容から推測すれば、史料①は「アウフェンアンガー神父が展覧会目録のために作成した手書きのメモ」と判断できるのではないだろうか。調査を行ったリストは原文の複写ではあるが、収集者本人によるコレクション内容の表記という点で貴重なメモといえる。

次に、史料②の「LIST A CHIMBU AREA」のリストをみていきたい。このリストは、「A-〇〇」という番号の項目が設けられている。リストにあるチンブーは、高山地帯にある地域名称の一つである。調査団は1964年9月末に、この地のミンゲンデにある神言修道会伝道所へ訪れている（早川2011: 129）。そのことから、このリストの資料は調査団が収集したものと考えてよいであろう。

さらに、史料②に対して検討を加えるために、史料③の内容にも触れる必要がある。史料③には「分類No」という項目があり、ここには数字のみの番号とA番号が並んでいることが確認できる。この数字のみの番号を、史料①の「NO」に記載された数字と照合すると、両者は一致することがわかった。

このことから、史料③の数字のみの番号はアフエンアンガーコレクションを示していると見て良い。そして、そのまま捉えるならば、地名が高山地帯となるA番号は調査団が収集した資料と考えるのが妥当である。つまり、史料③のA番号の表記は南山大学東ニューギニア学術調査団によって収集された資料を示していると考えられる。そして、史料②と史料③のA番号資料を照合すると、英語と日本語で表記のゆれがみられるが、概ね一致する。このことから、史料②は南山大学東ニューギニア学術調査団の収集した資料を示したリストと考えられる。

この時点で史料①と史料②が示す内容が明らかになった。ここでその内容についてまとめておきたい。まず、史料①はアフエンアンガー神父による手書きのメモの複写であり、そのコレクション内容を示している（以下では、史料①は「アフエンアンガーコレクションリスト」を示す）。次に、史料②は南山大学東ニューギニア学術調査団が高山地帯で収集した資料を示している（以下では、史料②は「調査団収集資料リスト」を示す）。

こうした史料①と史料②の内容をふまえて再度、史料③をみると、1965年時の整理作業の状況について若干の推測が可能である。史料③のリストでは、注記④の登録番号が記載されていないことから、この時点では登録番号は設定されていなかったと考えられる。そして、アフエンアンガーコレクションと調査団収集資料は、それぞれの資料番号が「分類No」の項目に記載されていることから、1965年の展覧会の時点では、両資料群は注記上の分類がされており、史料①と史料②の番号はそのことを示す資料番号として機能していた、と考えられるのである。なお、史料①・史料②はともに登録番号による照合の痕跡がみられることから、1983年の収蔵品目録刊行時の整理作業では、資料番号と登録番号がともに整理作業によって認識されていたと思われる。

本節では、新しく発見された史資料について、その内容を確認するために、そこに記載された地名やメモなどを用いて分析を行ってきた。その結果、先述したように史料①と史料②にみる資料リストの内容を明らかにすることが

でき、さらに過去にみる資料番号の状況を知ることができた。次節で述べるように、これらの資料リストが、注記番号の意味を推測する上で重要な要素となるのである。

### 3-4 注記番号の意味と注記時期—史資料の照合作業から—

前節では、史料①がアフエンアンガーコレクションリスト、史料②が調査団収集資料リストであることが明らかとなった。本節では、注記番号の意味と、その歴史背景を推測するために、注記番号と資料リストとの照合作業を行い、併せて分析を行っていく。その結果、これまで不明確であった注記番号の意味を明らかにするとともに、その注記時期の推測へとつなげることができた。

まず、史資料と注記番号の照合作業を行っていく。先述したように、注記②には1桁から3桁の数字に加えて、「数字の最後に点を書く」という規則性から、それらを一定のまとまりとして捉えることができる。そこで、史料①のアフエンアンガーコレクションリストをみていきたい。ここに挙げられた分類番号も1桁から3桁の数字によって分類されていることから、注記②と史料①の関連性が推測できる。そこで史料①のリスト番号と注記②の注記番号の照合作業を行った結果、現時点で全ての資料ではないが、調査可能な資料については照合を確認することができた。つまり、注記②はアフエンアンガーコレクションを示した資料番号だったのである（以下、注記②はアフエンアンガーコレクション番号を示す）。

では、注記③に関してはどうか。同じように注記③も、その番号を史料②のリストと照合する作業を行っていく。こちらの資料は、まだ多くの資料ではないが、調査資料に関しては照合可能なこと、そして史料③の展覧会出品リストとの関係性からも、注記③は南山大学東ニューギニア学術調査団が収集した資料を示した資料番号と考えられる（以下、注記③は調査団収集資料番号を示す）。

さて、次に目を向けたいのは各番号の注記時期である。ここでは注記の順

番、つまり相対的な注記年代について検討していきたい。すでに、この注記番号の観察から、注記①の書き込みラベルと注記②のアウトフェンアンガーコレクション番号では、前者が先に貼り付けられ、後者が後から注記されたことがわかっている。これは書き込みラベルの端部に重なるインクの痕跡から判明したことである。また、1965年の展覧会時点で、各コレクションに対して資料番号が存在しているということは、その前にはすでに実物資料にも注記されている可能性が高いと思われる。

このように考えるならば、1963年から1964年に収集されたアウトフェンアンガーコレクション、1964年に収集された調査団資料は、陳列室に持ち帰られた後、早い段階で注記が施されたことになるだろう。つまり、これらの注記は、1963年から1965年の間に行われたものであり、まずは書き込みラベルが現地もしくは日本で貼り付けられ、その後、注記②と注記③が施されたと推測することができるのである。

本節では、これまで不明であった注記②と注記③について、史資料である資料リストとの照合作業から、前者はアウトフェンアンガーコレクション番号、後者は調査団収集資料番号であることを明らかにすることができた。このことは、1965年の時点において、資料番号による分類が機能しており、それは実物資料に注記という形で表れていたことを示している。そして、その注記時期も推測することができ、収集当時の整理作業の一端を知ることができる。

### 3-5 小活

本章では、注記①～③の注記番号について、番号自体の観察と、資料リストなどの史資料との関係から検討を行った。そこから注記①はアウトフェンアンガー神父直筆と思われる書き込みラベル、注記②はアウトフェンアンガーコレクション番号、注記③は調査団収集資料番号を示していることが明らかとなり、それぞれの注記の大まかな時期と順序を示すことができた。特に、注記②と注記③は1965年時には分類する規準として機能しており、おそらく1983年の収蔵品目録作成時までは認識されていたと思われる。

このように、注記番号は、今でこそ機能していないが、かつては分類を示す資料番号であった。では、どのようにして、現在の登録番号が機能するようになったのだろうか。次章では、この登録番号の設定背景に注目していく。

## 4 登録番号の設定背景と意味

登録番号は、どのように設定され、現在のように機能するようになったのか。そして、なぜ、既存の注記番号が機能していないのか。本章は、登録番号の注記時期や方法といった設定背景について、博物館関係者の証言や、図書館時代の展示室にみる資料配列から分析を試み、それがもっていた意味について考えていく。ここでみる登録番号の設定背景は、博物館の歴史とも密接に関係しており、結果として、それが現在のコレクションの課題へ結びついていたことが推測できた。ここで明らかになったことは、博物館資料の継承に向けた考察へつながっていく。

4-1 登録番号の設定時期—博物館に残された文書記録から—  
先述したように、注記④の登録番号は、注記②のaufwundenコレクション番号と注記③の調査団収集資料番号の後に付けられた。本節では、より具体的な時期を推測するために、博物館に残された関係者の記録から分析を試みたい。

その記録とは、2005年に、かつての担当教員によって行われたニューギニア資料の解説を記録した文書である<sup>19)</sup>。この解説は、2005年6月30日に行われており、当時の博物館スタッフに対して行われた。その解説のなかには、「収蔵資料カードは図書館3階に人類学研究所陳列室が存在していた際に、当時の学生に記載させて作成した。台帳は収蔵資料カードよりも新しい。」というものがある。この点を本節の分析対象とする。

まず、この収蔵資料カードについて説明していく。この証言にある収蔵資料カードは、長方形型のカードのことを指し、パプアニューギニア資料だけ

ではなく、その当時収蔵されていた考古資料から民俗資料に至るまでにカードが制作されている。このカードの左上には、資料に注記されている登録番号の記載があることから、カードと資料は番号によってつながり、お互いの情報検索が可能であることを意味している。現在は、資料台帳によって情報を検索することができるため、直接的にこのカードを使用する機会はあまりないが、博物館にて保管されている。

では、関係者の証言に目を移していきたい。関係者によると、収蔵資料カードの作成時期は、図書館3階の設置時期とある。この時期を人類学博物館の歴史と関連づけていく。その歴史をみると、人類学民族学研究所附属陳列室が1964年に山里町の図書館地下1階へと移転をし、1970年代前半に図書館3階へ、そして1983年にG棟地下へ移転をしている。図書館に設置されていた時期は、全体で1964年から1983年となり、地下1階は1964年から1970年代前半、3階は1970年代前半から1983年となる。ここから、登録番号と収蔵資料カードの設定時期を同時期と捉えるならば、登録番号の設定は1970年代前半から1983年の間と考えられるのである。しかし、そうではなく、カード作成の前と考えるならば、その設定時期は図書館時代の1964年から1983年として時期幅を広く捉えることになる。

今回の調査では、これ以上の言及は難しいため、ここでは登録番号の設定時期を図書館時代の1964年から1983年としておきたい。この点について、さらに調査を進めることができれば、より詳細な年代を絞り込むことも可能と思われる。今後の課題としておきたい。

本節では、登録番号の設定時期について、関係者の証言から分析をしてきたが、この点をふまえて、資料に注記された番号の順序について、まとめておきたい。最初に1963年から1965年の間に注記①の書き込みラベルが貼られた後、注記②・注記③が施され、そして図書館へ移転後の整理作業によって登録番号が設定されたのである。このように、新たに加わる形で設定された登録番号であるが、この設定背景と意味について、次節にて分析を行う。



4-2 登録番号の設定背景—展示室の資料配列との関係から—  
本節は、前節で挙げた疑問について答えるために、登録番号の設定背景について分析を試みる。そのために、本節で新たに注目するのは図書館時代の展示室にみる資料配列である。本節では、この展示室の資料配列と、登録番号の順番の照合から、その設定背景に対する分析を行い、次節につなげていく。

ここからの分析にはアウフェンアンガーコレクション番号を用いる。まずは、資料に併存して注記が施されるアウフェンアンガーコレクション番号と登録番号を見比べてみる。すると、お互いの番号の順番にバラつきがみられ、それぞれの番号の順番が、意識的に対応関係がとられていない様子が確認できる。つまり、既存の資料番号1・2・3という順番に対して、登録番号が11-1・11-2・11-3というような順番の対応関係にはなっていないということである。

展示資料のなかには、アウフェンアンガーコレクション番号40～42の「ワニの彫像」に対して、登録番号11-21～11-23が付けられ、両者の並び順が対応している列もあるが、一方で、43の「ワニの彫像」に対して11-149が、44の「鳥の彫像」に対して11-24が、45の「鳥の彫像」に対して11-11の登録番号が付けられるなど、片方の並びに対応しているとは言い難い様子もみられる。ここから、登録番号の番号順は、既存の番号に沿って設定されたものではなく、何か別の規準が存在すると考えられる。

では、その別の規準とは何なのだろうか。この疑問を解決する糸口となるのが、図書館時代の展示室の様子を撮影した記録写真である。図8、図9は、図書館地下1階に陳列室が設置されていた当時の展示風景を記録した写真である（図8、図9参照）。詳細な年は判明していないが、図9にある奥の窓から見える橋の構造から、この写真が地下1階時代の陳列室を撮影したものであることが判断できる<sup>20)</sup>。ここからは、この展示資料の配列に注目し、登録番号との照合調査を行っていく。図10-1と図11-1は、壁面展示を撮影した写真である。それをトレースした後に、対応する資料番号を加えたものが図10-2



図8 人類学民族学研究所陳列室(図書館地下1階)(1) [南山アーカイブズ所蔵]



図9 人類学民族学研究所陳列室(図書館地下1階)(2) [南山アーカイブズ所蔵]

と図11-2である(図10-1、図10-2、図11-1、図11-2参照)。トレース図の資料上の番号は、アウフェンアンガーコレクション番号が上段、登録番号は下段に示している<sup>29)</sup>。以下の分析では、この図も併せて参照していただきたい。

図10-2において、右上の上段から左に向かって並べられた資料は、アウフェンアンガーコレクション番号が36・57・32・82・165・35・55・163とあるのに対して、登録番号が11-52・11-54・11-50・11-58・11-56・11-51・11-53・11-55とつけられている。前者の並びでは、少し数字間のひらきが見える印象があるが、後者では11-50番代のなかにおさまっており、番号順にまとまりがみられる。図11-2をみると、向かって右から173・86・87・172・56・90・88・185とアウフェンアンガーコレクション番号が並ぶのに対して、登録番号は11-73・11-65・11-66・11-72・11-75・11-69・11-67・11-74とある。前者には多少のまとまりがありつつも全体としては数字のばらつきが確認でき、後者は11-60番代から70番代までの番号におさまることで、より番号順にまとまりがみられる。

このように、図10と図11の例からみると、アウフェンアンガーコレクション番号の資料番号と登録番号では、後者のほうがより番号順にまとまりがみられることがわかる。このことから、次の二点が指摘できる。

一点目は、図書館地下1階時代の展示配列は、既存の資料番号を規準にして、その順番通りに並べられたものではない、ということである。そのため、展示資料のアウフェンアンガーコレクション番号では、資料間で順番のばら

つきがみられるのである。推測ではあるが、当時は機能的分類を行った後に、壁や棚などの空間的条件との兼ね合いから展示の位置と並びが決められたと思われる。

二点目は、登録番号の設定が、主に展示配列に沿う形で行われた可能性が高いということである。だからこそ、登録番号の順番と展示配列の間に、対応関係を見出すことができるのである。もちろん、可能な範囲の限定的な調査であるため、その他の展示場所では、これに当てはまらない場合も考えられる。しかし、当時の登録番号を設定する一つの規準として、展示配列が意識されていたことはいえるだろう。つまり、登録番号の設定には、展示室という場と、資料の配列のあり方が大きく関係していたのである。

このように、登録番号と図書館時代の展示室に並ぶ資料配列を照合すると、その設定背景には、展示室という場が大きく関係していたことが明らかとなった。このことは、登録番号の順番が、当時の展示室の状態を表しているともいえ、図書館時代の展示室の状況を知るうえでも重要な情報と考えられる。次節では、このように登録番号が設定されたことの意味について考察を試みる。

#### 4-3 登録番号によるコレクションの統一

このように登録番号が設定されたことが、どのような意味をもっているのか。本節では、この点について、人類学博物館の歴史との関係から考察をしていきたい。

11-1から11-547まで、登録番号が設定されたということは、それまで収集背景によって分かれていたコレクションが、形のうへでは「パプアニューギニアの民族資料」として統一されたという見方もできる。それは、結果として、各コレクションのまとまりを崩す形になったといえるのではないだろうか。実際に、筆者が前任者から受け継いだ台帳などは、この登録番号順で並べられており、アウフェンアンガーコレクション番号などの資料番号はバラバラの状態になっている。そのため資料検索する際は登録番号を使用する。



図10-1 人類学民族学研究所陳列室の壁面展示(1) [南山アーカイブズ所蔵]

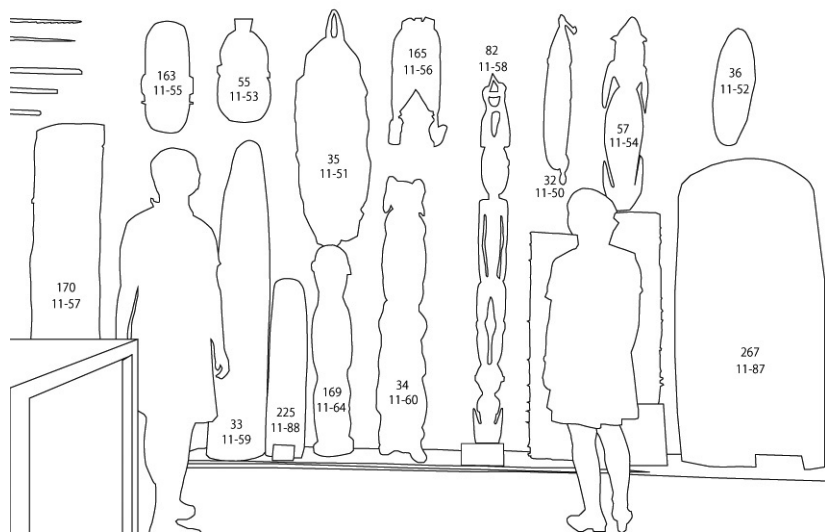


図10-2 人類学民族学研究所陳列室の壁面展示(1)(トレース図) [図10-1を元に筆者作成]



図11-1 人類学民族学研究所陳列室の壁面展示(2) [南山アーカイブズ所蔵]

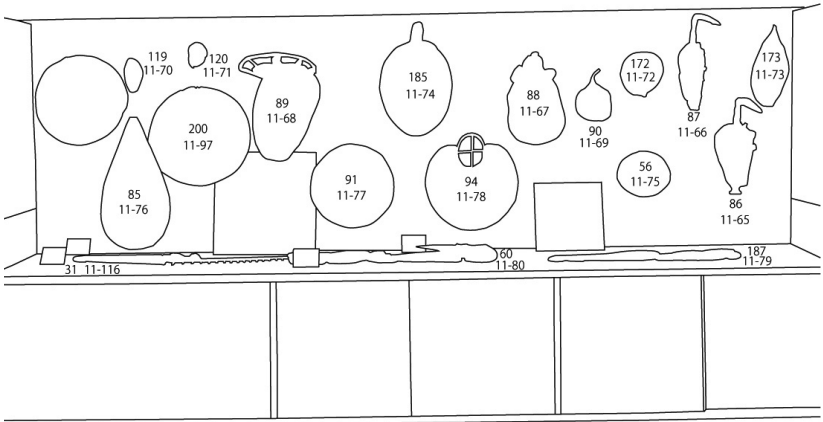


図11-2 人類学民族学研究所陳列室の壁面展示(2) (トレース図) [図11-1を元に筆者作成]

前節で述べたように、登録番号の順番と資料配列には関係性がみられるが、このことは既存のアウトフェンアンガーコレクション番号と調査団収集資料番号に関しては、あまり意識されていなかったとみることもできる。そのため、登録番号や資料台帳のうえでは、両者のコレクションが崩されて並べられてしまったのである。それでも、史料①や史料②に記された照合の痕跡が残されているように、1983年までは、各資料番号も意識されていた、つまり、その意味が伝えられていたと考えられる。

では、どの時点からこうした意識が見られなくなってしまったのだろうか。現時点の推測ではあるが、筆者は、G棟移転後にその傾向が強くなったのではないかと考えている。G棟へ移転すれば、展示空間も変化するため、資料の配列も変化したものと思われる。また、整理作業も代替わりしていくなかで、それまでとは整理方法などが変わったのではないだろうか。そのなかで、年月を経ても変化しないものは、資料と、そこに注記された登録番号である。登録番号は、資料とその情報をつなげるものであり、整理作業はこの番号を頼りに、資料と情報の間を行き来しながら、展示室という場で整理作業をすることができる。つまり、登録番号は代替わりする作業者を、「場」と「資料」につなげるものなのである。

このように整理作業が行われ、登録番号の使用が後任に引き継がれていくなかで、徐々に、各コレクションを示す既存の資料番号が示す意味が伝えられなくなったのではないだろうか。その結果、現在のように意味の不明な番号となってしまう、登録番号のもとで各コレクションが混在する状況が生じてしまったものと考えられる。

このようにみていくと、現状の博物館コレクションを理解するうえで、資料だけではなく、その整理作業の歴史や、それを行う作業者の記憶がいかに重要なものであるか気づかされる。展示室という場において、整理作業という日々の営みがコレクションを形成するのであり、作業も様々な状況化で意思決定をしていく。そして、そうした行為は、コレクションにも何らかの形で表れてくる。資料や番号そのものが伝えられることは前提のうえだが、

さらに、その背景にある歴史や整理作業の記憶が伝えられることも、博物館資料の継承においては重要なことと考えられる。

#### 4-4 小活

本章では、登録番号の設定背景について、関係者の証言や、図書館時代の展示室の状態から分析を試みた。その結果、登録番号の設定は、図書館時代に行われており、その展示室という場が関係していることが明らかとなった。その設定によって各コレクションのまとまりが崩され、さらには展示室の移転といった状況化で整理作業が行われるなかで、現在にみる登録番号の統一とコレクション間の資料の混在という状況につながったものと思われる。これは、博物館資料の継承において、資料整理作業の歴史背景や、それを行う作業者の記憶も重要なものであることを教えてくれる。

### 5 博物館資料の継承へ向けて—むすびにかえて—

本稿では、整理作業をヒトとモノの相互関係にある歴史的営為と捉え、南山大学人類学博物館所蔵パプアニューギニア民族誌資料について、そこに注記された資料番号と登録番号に焦点をあて調査を行った。ここでは資料リストなどの史資料や図書館時代の展示配列に着目し、各番号の歴史背景と意味について分析を行った。その結果、注記①はアウフェンアンガー神父による書き込みラベル、注記②はアウフェンアンガーコレクション番号、注記③は調査団収集資料番号であること、そして、注記④の登録番号の設定における図書館時代の整理作業や展示室との関係性が明らかとなった。また、これらの番号は、書き込みラベルからアウフェンアンガーコレクション番号、調査団収集資料番号と順番に注記され、図書館に移転した後、登録番号の設定がされている。登録番号の設定後、G棟へ展示室が移転するなど、様々な状況化で行われた整理作業は、結果として既存の資料番号の意味が失われ、登録番号のもと各コレクションが混在するという現在の状況に至るのである。

このように当該資料に注記された番号と登録番号の歴史背景をみていくと、人類学博物館は、その前身である人類学民族学研究所付属陳列室の頃から、移転が繰り返され、博物館の場自体が変化していることがわかる。このことは、整理作業や展示する場が、必ずしも同一な状態が保たれるわけではなく、それらが歴史的に様々な状況化で変化しながら資料整理作業が行われてきたことを意味する。だからこそ、整理作業者にとって、資料に設定された番号は、博物館という空間のなかで、自分と、「資料」や「場」をつなぐものとして重要になると考えられる。おそらく、G棟移転後の登録番号は、よりこの傾向が強くなったのではないだろうか。整理作業時に、登録番号が使用されること、そして、その方法が伝えられ続けたことで、既存の資料番号はたとえ注記などの形として残っていても、その意味が失われてしまったものと考えられる。

本稿の資料番号の例をみれば、注記の意味を伝えることの重要性がわかる。それが失われると、実物資料と情報が分離され、通時的な意味からいえば、過去と現在のコレクションの同一性を確保する媒介が失われることを意味する。また、登録番号の例をみれば、図書館時代の展示室という場自体が、その設定背景を伝える重要な情報をもっていることがわかる。ヒトの記憶とともに、場の記憶も現状のコレクションを理解し、後世に伝えるための大切な要素なのである。

このように、博物館資料は、博物館という「場」における様々な歴史的営為によって形成されており、その歴史背景を知ることは、コレクションの理解という意味でも重要なものとする。そして、博物館資料を継承するということは、資料のみを指すのではなく、博物館という場がもつ様々な記憶も含めて後世に伝えていくことを意味すると思う。

こうした歴史背景を再構成するためにも、本稿で示したような史資料を含めた関係資料から複合的に調査を行うのは有効な方法と考える。しかし、ここでも全ての問題を解決できてはならず、以前として課題は残されている。例えば、図書館時代における移転時期やそこでの整理作業など、今でも歴史



認識が曖昧な部分がある。こうした部分は今後の調査で補完していく必要がある。今後も継続的な調査をしていきたい。

本稿で示した博物館資料の歴史的問題は、おそらく様々なレベルで各博物館でも生じ得る問題と思われる。本稿がこうした資料整理作業に関わる議論、ひいては博物館資料論に寄与できたら幸いである。

## 謝辞

日々の資料整理作業は、学生アルバイトなどの博物館スタッフに協力してもらっている。今回の調査も彼らのおかげで進めることができた。末文ではあるが、ここに感謝の意を表したい。

## 註

- 1) 『南山大学五十年史』では重松和夫、『南山学園創立75周年記念誌HOMINIS DIGNITATI』では黒沢浩が執筆をしている。
- 2) この図書館内に陳列室が置かれることで、利用の点での広がり期待されたが、陳列室が常時公開ではなかったこともあり、効果的な措置とまではいかなかったようである（永井 2011: 162）。
- 3) その前年の1966年に、学内において学芸員課程の設置希望が人類学教員から出され、あわせて博物館実習用の施設として、人類学研究所付属陳列室を博物館相当施設として認可申請する希望が出されている（永井 2011: 162）。
- 4) 1971年11月30日付「大学院経営学研究科経営学専攻修士課程設置認可申請書」では、図書館地下1階に人類学展示室144㎡+76㎡と人類学整理室72㎡が、3階に事務室15㎡・音楽室73㎡・講堂146㎡・ポンプ室9㎡が設置されており、この時点ではまだ移転されていなかった様子が伺える。1973年11月26日付「大学院文学研究科独文学専攻修士課程設置協議書」をみると、同様の施設が各階に設置されていたようである。そして、1976年6月30日付「法学部設置認可申請書」では、図書館3階に人類学展示室146㎡・人類学準備室73㎡が設置され、地下1階にも展示室73㎡が残されていたことがわかる。こうした記録からは、図書館地下1階から3階への移転は1973年～1975年に行われたと推測することができる。
- 5) このG棟からR棟への移転の経緯については黒沢浩の報告に詳しい（黒沢 2014）。
- 6) その歴史のなかで関わった教員は、中山英司、小林知生、吉田章一郎、重松和夫と変わり、人類学科－人類文化学科の教員として南山の卒業生でもある伊藤秋男、

早川正一も運営に関わっていた。

- 7) 各博物館収蔵資料の概要は、黒沢に詳しい(黒沢 2014)。
- 8) アウフェンアンガー神父が報告した論文の特徴は、調査者による分析がほとんどないことにあり、その論文は“Custom Report”と呼ばれ、現地の習慣や伝承などの文化的事象の多くが記録されている(Terence 1992: 23)。
- 9) 考古学班の調査成果については、小林知生・早川正一による「東ニューギニア高山地帯における洞窟遺跡の考古学的調査」の報告に詳しい(小林・早川 1971)。
- 10) この新規資料は、早川が所有していた調査団関連の資料である。そのなかには、儀礼用石斧、装身具などの実物資料に加えて、調査時に撮影した8mm・16mmのフィルムなどの映像資料、調査の計画書や調査日誌などの記録文書類も含まれていた(山崎 2007: 73)。山崎は、台帳をもとに資料の所在を確認し、それについて早川氏からコメントをもらう形で行った。また、木田はこの映像資料を用いて、特別展「ワールドの記憶—生誕100年人類学者沼沢喜市のニューギニア調査写真から—」を手がけ、その経緯と目的についてまとめて、映像資料がもつ展示活用の可能性について言及した(木田 2008)。
- 11) 臨時職員であった林によると、この時期に山崎氏は新しい資料台帳の作成に取り組んだようである(林 2009: 29)。この資料台帳は、陳列室が図書館3階に設置されていた時期に、早川氏が行った資料集像カードと資料台帳をA4用紙一枚に収まるように統合したものであり、これが現在も使用している台帳になる。
- 12) ここで扱うのは、登録番号11-1から11-547の547点であり、早川が寄贈をした2007・2008年度新規登録資料に関しては取り扱わない。これらの資料は寄贈されるなかで寄贈者による情報収集も進められており、その確度が高いと思われるからである。
- 13) これは文字情報が表記された紙製ラベルであることから必ずしも注記番号とはいえないが、整理作業の経緯を知る上で重要なものとなるため、本調査では加えるものとする。
- 14) この検証方法は、アウフェンアンガー神父が収集に関わった資料について、その著書である*Passing Scene in New-Guinea*の記述から同定を試みた竹尾の方法を参考にしている(竹尾 2014)。
- 15) このネグリ地区は、アウフェンアンガー神父が調査した場所として*Passing Scene in New-Guinea*にも*The Negri area*として紹介されている(Aufenanger 1972: 187-206)。
- 16) この「最後の未開地 東ニューギニア展」は1965年5月11日から16日にかけて開催された。会場は名古屋市の松坂屋7階である。この展覧会の主催は、南山大学東ニューギニア学術調査団・東海テレビ放送・中日新聞、後援は文部省・愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会である(中日新聞 1940)。
- 17) ただし、全ての資料が紹介されているわけではなく、掲載されたのは174点であ

- る。例言には、「次年度以降に続けて第2分冊以下を刊行する予定である」(南山大学人類学博物館 1983)とあるが、残念ながらこれ以降は刊行されていない。
- 18) 個人名かつ本稿では表記する必要がないと考えるので、名前は伏せている。
- 19) この文書は博物館事務室に保管されていたファイルより見つかった。
- 20) 現在の南山大学名古屋キャンパスの図書館は、1964年の山里町へ移転時に建設されたものである。当時は地上3階、地下1階の構造をしており、この地下1階に陳列室が移転されていた。当時は、図書館東側に駐車場が設置され、その間には壕が設けられていた。そのため駐車場から図書館へ入るための橋が架けられていた。この校舎の様子は、『南山大学五十年史 写真集』のなかでも掲載されている(南山大学50年史作成小委員会 1999: 235)。その後、蔵書の増加などの理由から1980年5月に図書館東側に事務室と地下2階の書庫を増築し、その際に壕も埋め立てられている(南山大学五十年史 2001: 468-469)。図9の窓の外に見える橋は、当時の橋の構造を写している。
- 21) なお、写真から同定が難しい資料に関しては、その番号を記していない。

## [引用・参考文献]

- 中日新聞(編) 1965 『最後の未開地 東ニューギニア展』、中日新聞。
- 伊藤敦規 2013 「民族誌資料の制作者名廻及調査一『ホビ製』木彫人形資料を事例として一」『国立民族学博物館研究報告』37号4号: 495-633。
- 長谷川真美 2012 『博物館・整理作業におけるモノとヒトの民族誌——海洋文化館とその資料の足跡を追う——』、南山大学大学院人間文化研究科修士論文(未公開)。
- 早川正一 2011 「南山大学東ニューギニア学術調査団の高山地帯における人類学調査(1964年)の回顧とその概要—考古学班の発掘成果と出土資料の人類学博物館での活用の展望—」黒沢浩・森部一(編)『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第5冊 南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の研究: タイ北部山地民の現在/パプアニューギニアの物質文化』、南山大学人類学博物館、127-146頁。
- 林佑 2009 「南山大学人類学博物館所蔵パプア・ニューギニア資料の整理と再考」『南山大学人類学博物館紀要』第27号: 29-32。
- Hays, E. Terence 1992 A Historical Background to Anthropology in the Papua

New Guinea Highlands. In Hays, E. Terence(eds.), *Ethnographic Presents: Pioneering Anthropologists in the Papua New Guinea Highlands*. Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press, pp. 1-36.

北澤智豊 2016 「所蔵品の整理について—武蔵野美術大学美術館・図書館の事例を中心に」『ミュージオロジーの展開 経営論・資料論』金子伸二・杉浦幸子（編）、武蔵野美術大学出版局、334-357頁。

木田歩 2008 「博物館における映像資料の可能性—特別展『フィールドの記憶—生誕100年人類学者沼沢喜市のニューギニア調査写真から—』を振り返って—」『南山大学人類学博物館紀要』第26号：11-29。

黒沢浩 2007 「人類学博物館の資料収集」『HOMINIS DIGNITATI 1931-2007 南山学園創立75周年記念誌』南山学園創立75周年記念編周委員会、136-139頁。

黒沢浩 2014 「人類学博物館のリニューアル」『南山大学人類学博物館紀要』第32号：1-17。

小林知生・早川正一 1971 「東ニューギニア高山地帯における洞穴遺跡の考古学的調査」『W・シュミット生誕100年記念論文集』南山大学人類学研究所（編）、中日新聞社、43-118頁。

Knecht, Peter 1996 Nanzan University's ties with Papua New Guinea. *Verbum SVD Vol.37*. Nettetal: Steyler Verlag, pp. 81-92.

クネヒト・ベテロ 1998 「南山大学による「東ニューギニア学術調査団」の行動と成果の回顧」『アカデミア 人文・社会科学編』67：83-108。

永井英治 2011 「南山大学人類学博物館設置に至る経緯」黒沢浩（編）『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第1冊 学術資料の文化資源化』、南山大学人類学博物館、157-166頁。

南山大学五〇年史作成小委員会（編）1999 『南山大学五十年史 写真集』、南山大学。

南山大学五〇年史作成小委員会（編）2001 『南山大学五十年史』、南山大学。

南山大学人類学博物館 1983 『パプアニューギニア民族資料（1）収蔵品目

- 録第1号第1分冊』、南山大学人類学博物館。
- 南山大学史料室（編）2011 『南山学園史料集6 南山大学の人類学』、南山学園。
- 南山学園創立75周年記念誌編集委員会（編）2007 『HOMINIS DIGNITATI 1931-2007 南山学園創立75周年記念誌』、学校法人南山学園。
- 笹倉いる美 2000 「北海道立北方民族博物館の所蔵資料とその整理について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第9号：85-103。
- 竹尾美里 2014 「アウフェンアンガー師のセピック河流域調査と人類学博物館所蔵資料について」『南山大学人類学博物館紀要』第32号：19-26。
- 棚橋源太郎 1950 『博物館学綱要』、理想社。
- 山崎剛 2007 「人類学のための映像資料、博物館のための映像資料—2006年度ニューギニア資料整理作業の報告と課題—」『南山大学人類学博物館紀要』第25号：73-86。

# Toward the inheritance of museum objects: Historical analysis of object numbers noted in Papua New Guinea ethnographic objects in Nanzan University Museum of Anthropology

NYOHOJI Keita

## Abstract

The purpose of this study is to analyze the meaning and historical background of object numbers and inventory numbers noted in Papua New Guinea ethnographic objects in Nanzan University Museum of Anthropology and to consider the problem of inheritance of museum objects.

In these objects, in addition to the inventory numbers, multiple object numbers are noted. But we do not know the meaning and historical background of these numbers. This study attempts to clarify the meaning and historical background that we did not understand with long-term registration work.

First, the approach employed in this analysis was as follows:

- (1) Observation of object numbers
- (2) Checking object numbers against the historical document

Next, the approach to clarify the meaning and historical background was as follows: Check inventory numbers against the arrangement of objects in the exhibition room which was established in the library.

As a result, to clarify about object numbers and inventory numbers is as follows:

- (1) Object number ① is the label written by Father Henry Aufenanger.
- (2) Object number ② is the number indicating objects collected by Father Henry Aufenanger.
- (3) Object number ③ is the number indicating object collected by the Nanzan Scientific Expedition to the Eastern Highlands of New Guinea.

- (4) Historical background of inventory numbers is close related to registration work and the arrangement of objects in the exhibition room which was established in the library.
- (5) The meaning of object numbers was lost because it was unified by the inventory numbers.

Finally, in order to pass the museum objects down to future generations, I think that it is necessary to pass down not only the date but also the history of the registration work and the memory of workers.